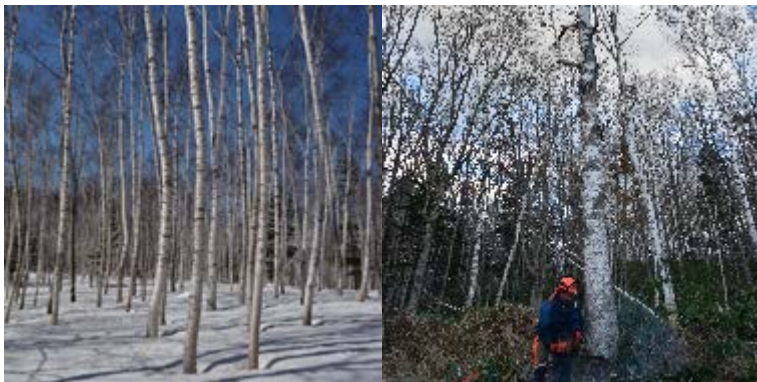


北海道大学

## 白樺プロジェクト：多彩な「川下」の方々と連携しています

「白樺プロジェクトに入りませんか？」と、声かけをいただいたのは、つい先ごろ、2019年の春でした。聞けば、家具工房や建築、デザイナー、自伐林家、研究者の集まりで、6月に行われる家具の展示会「旭川デザインウィーク（ADW）」——総来場者数が1万5千人を超える大イベント——に向けて、プロジェクトの展示を準備中とのこと。タイミングがよかったのは、ちょうど私たち研究林の伐採作業地に、シラカンバ二次林が含まれていたことです。



シラカンバ二次林とその伐採（北大雨龍研究林）

白樺プロジェクトの方がたは、その後、何回か伐採現場にお出でになり、技術職員・技能職員を交えた相談のうえで、シラカンバ材とともに、その切株や枝を持って帰られました。



ADWの展示スペース（「白樺プロジェクト」提供）

そして、ADWの当日。展示スペースは、その切株と枝（加えてチェーンソー）を中心に配置されていました。「伐採したことが利用につながる」というメッセージ。「川上」の立場の私たちとしては嬉しい限りです。

プロジェクトのキーワードは「持続可能性」と「恵みの多様さ」。前者は、成長が速く更新が比較的容易なシラカンバの特性、そして、それは、私たち北大研究林が長年にわたって取り組んできた育成技術と関係します。一方、後者は、樹皮、樹液、葉、根など「一本丸ごと利用可能」であることを指しています。展示には、樹皮を使った器やカゴ・クラフト、樹液の飲料・化粧水、葉からの染め物、灰釉薬を使った陶器など、本当に多彩な「恵み」が北海道中から集まっていました。

そして、もちろん、木材としての利用も。テーブル、椅子、床材、羽目板、造作材……。いずれも、シラカンバ＝パルプ材というこれまでの固定観念を覆す、明るい存在感を示していました。シラカンバをとおして森林と生活者を結び、産業として、文化として根付くことを目指す、というプロジェクトの理念は、多くの来場者に伝わったのではないかと、思います。



シラカンバ材を使った家具（「白樺プロジェクト」提供）。いずれも、樹皮を活かすことで、ひと目で「白樺」とわかるデザインになっています

その後半年あまり、いろいろな活動がありました。7月初旬には樹皮の採取。8月にはシラカンバ丸太のカウンターを持つレストラン、9月にはメンバーが経営するゲストハウスが、ともに旭川市内にオープンし、近隣に住む自伐林家さんと森一市民を結ぶ活動を進めています。そして、ちょうどこの稿を書いている11月には、東京でインテリア・ライフスタイル・リビングの国際見本市へも出展しました（今回はシラカンバ製ギターも展示されました）。

それぞれのイベントが成功する一方で、この取り組みを「一過性に終わらせない」こと、がメンバーの共有する大課題です。シラカンバの付加価値と可能性を多くの人に理解してもらうことは重要。しかし、それは、オーバーユースにつながってしまうのでは？ 成長は確かに速いが、本当に持続可能性は担保できるのか？ そのためにプロジェクトはどうあるべきか？ メンバーである、経済学の先生も加わった議論は、尽きることがありません。

研究林では、この課題をテーマとして、10月末、大学院の集中講義を（関係者にも大いにお世話になりつつ）実施しました。シラカンバ二次林の伐採は今年度も予定されています。素材を提供するとともに、成長や材質の研究を進めるうえでもまたとない機会です。今後も、教育・研究・事業のそれぞれに深く関わりを持つこのプロジェクトと「持続的」「多様」につながっていきたいと考えています。



白樺プロジェクトのHP：<https://shirakaba-project.jp/index.html>